猫の病気とは？
猫がかかりやすい病気と対策・治療方法などをご紹介

猫と一緒に生活をする場合、猫のかかりやすい病気を把握しておくことは、非常に重要なことです。今回は、猫がかかりやすい病気をまとめてご紹介します。

猫がかかりやすい病気の年齢別まとめ

ここでは、猫がかかりやすい病気の年齢別まとめをお伝えしていきます。

• 0歳

赤ちゃん猫の場合、下痢、結膜炎、外耳炎、嘔吐、膀胱炎などの症状が出やすいです。体力が未熟であるため、放置すると重篤化する可能性も高いです。

• 1～6歳

膀胱炎、嘔吐、結膜炎、下痢、皮膚炎などの症状が出やすいとされています。特に、猫は泌尿器系の病気になりやすいと言われているため、膀胱炎には気をつけてください。

• 7～9歳

シニアと呼ばれる世代となる手前になると、膀胱炎、嘔吐、結膜炎の他、腎臓病や外耳炎などの病気も出やすくなると言われています。

• 10～12歳

10歳以上の猫は、一般的にシニア（老猫）と呼ばれます。この時期になると、嘔吐、下痢、胃腸炎の他、慢性腎臓病などの病気にもかかりやすくなるため、要注意です。

• 13歳～

13歳以上となると、かなり高齢となるため、嘔吐、膀胱炎の他、慢性腎臓病、甲状腺機能亢進症などの病気にかかりやすくなります。

猫がかかりやすい病気・対策・治療方法まとめ

• 感染症

猫は感染症にかかりやすく、その種類も様々です。主な感染症の種類としては、以下があります。

- 上部気道炎

上部気道炎は、いわゆる猫風邪と呼ばれる病気で、細菌・ウイルス・クラミジアなどが原因となって発症します。主な症状としては、鼻水・くしゃみ・鼻づまりなどの他、結膜炎・目ヤニ・涙目・まぶたの腫れなどがあり、子猫に特にみられやすい症状です。

治療方法としては、動物病院にて、抗生剤・抗ウイルス剤、インターフェロンなどを投与する内科治療を受けることが挙げられます。

- 猫パルボウイルス感染症

猫伝染性腸炎、猫汎白血球減少症とも呼ばれ、発熱、下痢、食欲不振、嘔吐などの症状がみられます。重篤な急性腸炎を起こす可能性もあるため、注意が必要です。

治療方法としては、抗生剤、点滴、インターフェロンなどを投与する内科治療で予防することが可能です。

- 猫伝染性腹膜炎（FIP）

１歳未満の猫にみられやすい症状で、数日～数ヶ月で死に至る可能性もあるため、危険な感染症です。主な症状としては、発熱、食欲不振、黄疸、腹水・胸水が溜まるなどです。

治療方法としては、ステロイド剤、点滴、利尿剤による内科治療があるものの、有効な治療方法はなく、発症のメカニズムもよくわかっていません。

- 猫白血病ウイルス感染症（FeLV）

野外で飼育されている猫に多くみられる病気です。感染すると、発熱、貧血、リンパ腫、白血病、歯肉口内炎などを発症し、重篤な症状の場合は死に至る可能性もある、注意が必要な感染症となっています。

治療方法としては、抗ウイルス薬、インターフェロンの投与などが挙げられますが、ワクチン接種、他の猫との接触をさせない、室内飼育の徹底などの予防が最も重要です。

- 猫免疫不全ウイルス感染症（FIV）

猫免疫不全ウイルス感染症（FIV）は、猫エイズとも呼ばれており、野外で生活する猫は３割前後も感染しているとされている病気です。主な症状としては、キャリア期は無症状であるものの、発症すると、発熱、下痢、リンパ節種の肥大などがみられます。その他、体重の減少、貧血、歯肉口内炎、上部気道炎など、様々な症状を併発します。

治療方法としては、抗ウイルス薬、インターフェロンの投与などが挙げられますが、そもそも罹患しないように、野良猫との接触を避け、室内飼育を徹底することが重要です。

• 猫下部尿路疾患

尿路感染症、尿石症、特発性膀胱炎など、膀胱または尿道では発症する猫の病気の総称です。猫は泌尿器系の病気になりやすい傾向があるので、注意が必要です。症状としては、血尿、頻尿、決まった場所以外での排尿、失禁などが挙げられます。

治療方法としては、軽症の場合は注射および内服薬での治療となります。結石が尿道に詰まってしまった場合には、カテーテルを使用した尿道の治療が必要です。重篤化している場合には、陰茎切除が必要となる場合もあります。

• 腎臓病

７歳程度から発病する確率が上がり、15 歳以上で３割以上が罹患するとされています。症状としては、嘔吐、多飲多尿、体重減少、食欲不振などが挙げられます。

治療方法については、食事療法、輸液、降圧剤や吸着剤などの内服治療があります。腎臓病は、症状がわかりにくく、飼い主の気づかないうちに症状が進行する場合が多いため、７歳程度になったら定期検診を受けることをおすすめします。

• 歯肉炎・歯肉口内炎

猫は歯肉口内炎にかかりやすいとされており、６～７％が罹患するとされています。原因としては、細菌・ウイルスの口腔内の感染、免疫反応異常などが挙げられますが、詳しい発症の原因はわかっていません。

主な症状としては、よだれを頻繁に垂らす、食欲不振、体重減少、口を気にして引っ掻く、餌を食べる時やあくびの際に痛そうにする、などがあります。

• 甲状腺機能亢進症

８歳以上のシニアに近づいた猫にみられやすい病気で、３～５％の猫が罹患するとされています。甲状腺ホルモンを過剰分泌する良性腫瘍が原因とされており、主な症状としては、嘔吐、下痢、食欲不振、体重減少、多飲多尿などがあります。

治療方法としては、食事療法、抗甲状腺剤の内服による内科療法、甲状腺摘出の外科療法が挙げられます。血液検査で判明することが多いため、７歳程度になったら定期検診を受けることが重要です。

猫がかかりやすい病気を把握し、動物病院での診断と定期検診をしっかりと受けることが重要

猫は何らかの病気に罹患していても、症状がわかりにくいケースもあるため、異常がみられた場合には放置せずに動物病院に連れて行くこと、定期検診を受けることを習慣づけるのが大切であると言えます。

ノミ・マダニに関する最新情報をチェック！
LINE 公式サイト　LINE@友達募集中 ➡

MSD Animal Health
JP-BRV-210700008